

日本の学術コミュニケーションとオープンアクセス

大場高志（国立情報学研究所）

1. 欧米 SPARC のオープンアクセス

SPARC 活動は欧米の大学図書館における学術雑誌の異常な高騰による購買危機、いわゆる Serial Crisis に対抗するものとして、研究者の意識変革や学術コミュニケーション（研究者、出版流通関係者、図書館）の変革運動として始まったものである。Elsevier 等の商業出版社に対抗する雑誌を創刊などしていたが、2004 年からは SPARC Europe とともにオープンアクセスへの傾斜を鮮明にしている。

2. 日本のオープンアクセス

日本における学術電子ジャーナルについては、多くの学術誌が海外出版社から発行されており、日本国内にサイトを持つものは幾つかの有力学会が自サーバを運営しているほかは、主に科学技術振興機構の J-STAGE がその機能を担っている。J-STAGE は編集機能、公開機能を中心としており、そのほとんどは学会員向け ID 制御以外はフリーアクセスとなっている。これをオープンアクセスというかどうかは別にして、日本の学術電子ジャーナルはフリーアクセス以外のビジネスモデルをいまだ持っていないのが現状である。

3. 日本の図書館に期待するもの

日本の図書館は海外商業出版社の高額な電子ジャーナルをどのように購入していくべきかに多大の苦勞をしていると思うが、日本国内の学術誌の現状もまた厳しい環境になっている。日本の電子ジャーナルは、いわば既にオープンアクセスであると言えなくもない。では、このままでよいのか。大学図書館は学術情報の消費者である研究者と教育研究支援のためのコミュニケーションを図るだけでなく、生産者である研究者、そして、生産される研究論文の流通を支える学会との学術情報流通のコミュニケーションを図ることが、今最も期待されていると考えている。